

---

---

# 日本地球化学会ニュース

No .180

2005 .3 .15

---

---

## 主な記事

### ●学会記事

- 2005年度日本地球化学会年会のお知らせ(1)
  - 地球惑星合同大会共同開催セッションのお知らせ
  - ゴールドシュミット2005セカンドサーキュラ配布
  - 地球化学講座よりどりまとめて2割引
  - 地学教育委員会より
  - 2004年度地球化学会年会の報告
  - 鳥居基金助成実施報告
  - 評議員会，研連，各種委員会議事録
- ### ●その他のシンポジウム，人事公募等の各種情報のお知らせ
- 書評

日本地球化学会のホームページが新しくなりました

URL アドレスは，<http://www.geochem.jp/>です。

より見やすく分かりやすくを目指しております。

研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報は随時更新しておりますのでそちらもご覧ください。

会員の皆さまのご意見をお待ちしております。

## 2005年度日本地球化学会年会のお知らせ(1)

主催：日本地球化学会

共催：日本化学会

会期：2005年9月26日(月)～10月2日(日)の間の3日間。  
はっきりした日時は次号のニュースに掲載致します。一般の方を対象とした地球化学講演会は那覇市内で交通の便がいい場所で開催します。これも日時については次号のニュースでお知らせします。

会場：琉球大学千原キャンパス共通教育棟

(西原町千原1)

那覇空港から北東へ約15 km にあります。バスで約1時間、モノレール(ゆいレール)からタクシーに乗り継いでも、約1時間です。

内容：課題討論，一般講演(口頭発表とポスターセッション)，学会賞受賞講演，総会，懇親会

講演申し込み締め切り：2005年7月6日(水) 14：00まで，開始は3週間前6月15日(水) 14：00から

講演要旨の申し込み締め切り：2005年8月3日(水) 14：00まで，開始は2週間前7月20日(水) 14：00から

参加申し込みの締め切り：2005年9月7日(水) 14：00まで

各種申込みの日程で，曜日と時間が指定となっておりますので，期日に遅れがないようにするとともに，時間にもご注意願います。また，これらの申込は，いずれも学会のホームページ上から行うことを検討しています。詳細は，次号のニュースをご覧ください。

課題討論の課題を募集いたします。そのほか，夜間の研究集会も可能です。メールで申込をしてください。締切は両方とも5月6日(金)です。課題討論を計画される方は，予め主幹となる講演者のめどを付け，その課題での一般申込があればそれを受け入れてください。課題討論の課題名と担当者名は，次号のニュースに掲載いたします。

年会連絡先：

〒903 0213 西原町千原1

琉球大学理学部海洋自然科学科化学系

渡久山 章

Tel：098 895 8526，Fax：098 895 8565

E-mail:atoku@sci.u-ryukyu.ac.jp

## 地球惑星合同大会・地球化学会学会 共同開催セッションのお知らせ

重要日程

参加登録締切：2005年4月13日(水) 12：00

合同大会レギュラーセッション「固体地球化学・惑星化学」

2001年から合同大会で「固体地球化学・惑星化学」というセッションを行っています。このセッションは，レギュラーセッションとして今後数年間続ける予定です。今年度も開催しますので，多くの方に参加していただくことを期待します。セッション情報は<http://www.epsu.jp/jmoo2005/>で見ることができません。

このセッションは，隕石や地球物質等の天然試料や実験生成物に関し，化学組成や存在形態，同位体比を用いた議論を行うことで，地球で発生する様々な過程，地球・惑星の進化，太陽系の成因等，過去46億年間で起こった現象について多角的に議論する場にしたいと思います。地球化学に限らず，地質学，岩石学など複数の分野からの講演者が集まって学際的な議論ができればと考えています。春のセッションでは，大学院生を含んだ若手研究者，他学会の研究者が自由に討論できる雰囲気作りに努めたいと思います。多くの方が，特に若手の方に是非参加していただければと思います。

ご意見等ありましたら，下田玄(h-shimoda@aist.go.jp)，鈴木勝彦(katz@jamstec.go.jp)，山下勝行(taro@kobe-u.ac.jp)，松本拓也(matsumoto@ess.sci.osaka-u.ac.jp)までお寄せ下さい。

合同大会レギュラーセッション「水循環・水環境」

水循環・水環境は2002年度の地球惑星合同大会から始まった多学会横断型のセッションです。水文・水資源学会，日本地下水学会，日本地球化学会，日本水文科学会の4学会の共同開催で，レギュラーセッションとして開催されています。複数学会が共催するセッションの数はまだ決して多くはなく，地球化学会ではこのセッションは1つだけですが，分野を横断した重要なテーマとして7学会が公認して開催が決まったものです。4年目にあたる今回の大会では，地球化学会が代表のコンピーナ勤めることになっています。

これまでにこのセッションで発表された研究テーマ

は、河川や地下水、蒸散や蒸発に関する水循環プロセス、流域や地球規模の水蒸気輸送、水資源としての水質や水量の問題など様々で、水同位体比や溶存イオンのデータを取り扱ったものも数多く発表されています。

2005年合同大会については <http://www.epsu.jp/jmoo2005/> を参照ください。水循環・水環境のセッション (H020) についてのご意見、お問い合わせは杉本敦子 (sugimoto@star.dti2.ne.jp) までお願いします。

多数の研究発表とセッションへの参加をお待ちしています。

### ゴールドシュミット国際会議 2005セカンドサーキュラ配布

ゴールドシュミット国際会議2005のセカンドサーキュラがPDF形式のファイルで配布されています。下記のホームページよりダウンロードしてください。

<http://www.the-conference.com/2005/gold2005/>

### 地球化学講座よりどりまとめて 2割引 (会員による申し込み限定)

地球化学講座に下記の第4巻と第6巻が新しく刊行されました。会員による申し込み限定ですべて2割引です。別に送料 (着払い) ががかかりますが既刊の第3巻と合わせて、2冊以上注文すると送料を入れても生協より割安です。お近くの方々 (非会員も) の希望も取りまとめてご注文ください。

第4巻「有機地球化学」(石渡良志・山本正伸共編):  
新刊 (昨年11月発売)

- 1章 地球と有機物: 概観 (下山晃・石渡良志)
- 2章 生体有機物 (半田暢彦)
- 3章 有機物の生産と堆積 (田上英一郎)
- 4章 堆積物中の有機物の分布と初期変化 (福島和夫)
- 5章 腐植物質およびケロジェン (石渡良志)
- 6章 堆積有機物の熱化学変化 (坂田將)
- 7章 有機分子の同位体組成 (奈良岡浩)
- 8章 有機分子による地球表層環境の解析と復元 (鈴木徳行・山本正伸)

第6巻「大気・水圏の地球化学」(河村公隆・野崎義行共編): 新刊 (3月発売)

- 1章 大気の構造 (岩上直幹)
- 2章 大気組成とグローバル変化 (河村公隆・植松光夫)
- 3章 成層圏の光化学 (今村隆史)
- 4章 対流圏の光化学 (梶井克純・河村公隆)
- 5章 大気成分のグローバル循環 (植松光夫・沼口敦・河村公隆)
- 6章 陸水の地球化学 (小倉紀雄)
- 7章 海水の元素組成 (乗木新一郎・中山英一郎・田上英一郎・小畑元・野崎義行)
- 8章 海洋における元素の分布を支配する要因 (野崎義行)
- 9章 海洋境界を通しての物質のフラックス (増澤敏行・吉川久幸・谷口真人)
- 10章 海底堆積物の地球化学 (加藤義久)

第3巻 マントル・地殻の地球化学 (野津憲治・清水洋共編): 既刊

- 1章 固体地球の内部構造と構成物質 (入船徹男)
- 2章 固体地球物質の化学と同位体組成 (鍵裕之)
- 3章 元素の分配 (川邊岩夫)
- 4章 地球の誕生と形成直後の分化 (平田岳史)
- 5章 マントル 地殻系45億年の進化 (中井俊一)
- 6章 大気・海洋の形成と進化 (佐野有司)
- 7章 マントル・地殻における物質循環 (岩森光)
- 8章 堆積作用と地球表層環境の変遷 (清水洋)
- 9章 地殻内流体の関与する化学現象 (篠原宏志)

送付は受取人払い冊子小包およびゆうパック受取人払いのみとする。

・実際にかかる送料は5冊までは冊子小包で下記の通りです。それ以上はゆうパックを利用しますので送付先住所によって異なりますが、より割安になります。ただし実際にかかる料金は郵便局に直接持ち込む場合の割引100円 - 着払い手数料20円 = 80円を引いた金額になります。

(例) 名古屋の田中が10冊購入した場合は

80サイズ 愛知県 900円 - 持込割引100円 + 着払手数料20円 = 820円

勤務先に配達をされる時は、着払いの郵便物が来る事を、担当事務にあらかじめ話されておくと万全です。

注文冊数が1冊まで 360円

2～3冊まで 470円  
4～5冊まで 610円  
6～10冊まで ゆうパック  
80サイズ，料金は地域により変る  
11～20冊まで ゆうパック  
120サイズ，料金は地域により変る  
21冊以上は培風館の山本さんにご相談  
ください。

以下の申込書を印刷し，必要事項を記入の上，電子メール，ファックス，郵送で4月14日までに培風館（山本宛）にお送りください。本と一緒に送られた請求書の金額を指定の銀行口座に払い込んでください。また，校費購入等で代表者印入りの請求書等の発行はおこなえませんので，ご了承ください。

注文書送り先：

電子メール bfk-2hen@mx6.mesh.ne.jp（件名を「地球化学講座購入申込」としてください。）

ファックス03 3262 5357 培風館（山本新 宛）  
または，〒102 8260 東京都千代田区九段南4 3 12  
培風館編集部 山本新 宛

#### 注文書

「地球化学講座」を日本地球化学会会員割引価格で注文します。

注文巻号と注文部数

第4巻「有機地球化学」特別価格（税込3108円）	冊
第6巻「大気・水圏の地球化学」（税込3528円）	冊
第3巻「マントル・地殻の地球化学」（税込3192円）	冊
合計	冊

氏名

送本先住所（〒 ）

電話  
ファックス  
e-mail

## 地学教育委員会より 日本地球化学会会員の皆様へ

地球惑星科学関連学会の中の地学教育委員会で，地学を中心に教育について議論されておりますが，今年5月の合同大会の特別セッションA082「新しい地学教育の試み 2．学習指導要領を考える」の中で，日本地球化学会から教育課程についての提言の講演を行うことが決まっております。

担当の私ら2名の連名でつぎのような内容の講演を行う予定です。それにあたって，会員の皆様より，地球化学の視点から教育課程へのご意見をいただければ，講演に反映したいと考えております。是非，担当までご意見をお寄せいただくようお願い申し上げます。

題名「地球化学から見た高校までの教育課程への提言」

内容

- 1) 現在の地球化学研究  
年会の予稿集よりまとめてみます。
  - 2) 現状の教育課程と地球化学のかかわり  
現在の教科書の中で取り上げている地球化学分野についてまとめてみます。
  - 3) 教育課程の中に取り入れて欲しい地球化学  
・環境問題に関する地球化学的内容を文系の学生でも学ぶようにする  
・イオンや同位体（比）に関する内容を現在より早い時期に学ぶ  
・化学物質を単なる物質（知識）としてではなく，自然や生活，環境問題に結びついたものとしてとらえる視点をつくる。また，そのような方向での大学入試のあり方を各大学によびかける。
- など

以上の内容を主に提言したいと考えております。

担当 瀧上（関東学園大学）  
ytakigam@kanto-gakuen.ac.jp  
高江洲（武蔵高等学校・中学校）

## 2004年度地球化学会年会の報告

日本地球化学会年会実行委員会委員長  
和田秀樹（静岡大学・理学部）

2004年度、日本地球化学会年会第51回年会は、9月20日(月)から22日までの3日間に渡って、静岡大学静岡キャンパス（共通教育棟，大学会館，食堂）で開催された。静岡での開催は初めてであったが、過去旧清水市の時代に東海大学三保キャンパスで2回開催している。

本年会に先立ち、9月19日(日) 13:00より15:00まで、JR 東静岡駅にある、静岡市コンベンションセンターである、グランシップ6階交流ホールにおいて、公開講演会が開催された。“駿河湾から地球が見えると題した本講演会は、平成16年度学術振興会の科学研究費補助金研究成果公開促進費「研究成果公开发表(B)」の補助を受けた企画で、地元に関わる研究成果を一般市民に普及する学会活動である。特に高校生等の次世代を担う若者を焦点に、大洋に大きく湾口を開き、世界でも指折りの深海を持つ駿河湾の姿と太平洋など深海の堆積物から読みとれる地球環境の歴史の研究最前線を紹介した。演者は、東海大学・安田訓啓教授、静岡大学・鈴木款教授、産業技術総合研究所/東北大学教授、川幡穂高教授の3名で、参加者は、130人余りであった。

本年会の参加者、講演数等は下記のとおりである。

### 講演数

講演申込	284
口頭発表	165
ポスター発表	113
キャンセル	6
参加者	337

講演は、一般講演の他、課題講演を公募し、(1)アラユルニウム地球化学、(2)大気エアロゾルと前駆体の地球化学、(3)地下生物圏の地球化学、(4)海洋の微量元素・同位体マッピングによる生物地球化学サイクルの解明の4課題を各会場半日ずつのセッションを開催した。一般講演は、4会場で160の講演発表があった。ポスターセッションによる発表は113件で、会場は第1学生食堂で開き、科学機器メーカーや出版社による展示・販売も同会場で行われた。食堂をポスター会場とするメリットは、のどを潤す飲み物をサービスでき、展示ブース等も、訪問者の便がよいため多くの人を訪

れたことである。

9月21日(火)午後を使って、総会ならびに学会賞等受賞講演が行われた。講演は、学会賞として堀田十輔、植松光夫の両氏、奨励賞として横山哲也、丸岡照幸、松本克美の3氏の講演があった。同日夕刻から、生協第2食堂で懇親会が開催され、天岸祥光静岡大学学長ほかの来賓の方々を含め150名以上の参加があった。今や、日本のおいしい日本酒の揺るぎない地位を確保した静岡酵母の地酒と、直接インドから仕入れたマッサラを使った特製カレーはこのほか評判が良かった(?)。夜間集会「日本地球化学会の今後の50年に向けて」と、GJ編集委員会、「地球化学から見た地学教育・理科教育問題」に関する集会が開催された。

年会開催地での、事務処理の省力化・合理化をするため、電子情報での連絡を中心とし、地球化学ニュース編集担当の米田成一氏とホームページ担当の小林貴之の両氏には大変お世話になった。本年会講演の申込、参加登録等の公開方法については、和文誌「地球化学」に掲載の他、ニュース担当から直接電子メールで会員に送信されるメールニュースとしてお知らせをし、また、Web上で地球化学会のホームページ、及び、静岡大学のホームページから、静岡大学総合情報処理センターにおかれた年会専用のホームページにリンクし公開した。年会参加登録、講演申込、講演要旨の受付などは、J-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）の登録システムを利用した。

2003年度、静岡大学で開催された日本地質学会年会の経験をふまえ、年会への事前登録等の事務処理、参加費、懇親会費、宿泊・航空券等の予約受付と入金作業、会場設営、案内表示、当日会場での受付業務、講演会場での進行補助員の配置や講演に使うプロジェクターの配備等の業務を、大学生協に委託した。これによって、年会準備委員会の仕事量は大幅に軽減された。

講演プログラムの編集は、J-stageを使って登録されたリストを、指定されたソフトでダウンロードすることから始まる。このシートには、発表希望分野、発表希望日などすべての情報が含まれ、プログラム編集は容易である。講演要旨集の編集は、J-stageに投稿されたPDFファイルは、締切後、J-stageで指定されたWeb上のURLよりダウンロードにより入手(30MB)した。これらの作業は、ホームページ担当の小林氏が行ってくださった。PDFファイル原稿を、A4版に打ち出してプリント仕上がりをチェック

するが、フォントや図表などに字化け現象が時に見られた。グラフの位置など不具合もある。最も多かった不具合は、括弧などの位置が微妙にずれる現象で、モニター画面上では発見が難しく、印刷してわかる。静岡地方の印刷事情では、PDF ファイルを直接印刷用に使できる設備はない。

講演要旨を PDF ファイルにした時の、J-stage の入力環境等には大きな問題はなかった。入手した PDF ファイルを印刷し、印刷された原稿に講演番号とページを加印刷した原稿を印刷業者に渡し写真製版によって B5 版の講演要旨集が完成する。要旨集の事前発送は、期日までに申込と支払いが済んだ参加者に対して行われ、印刷業者に委託した。

これら年会執行業務に関して、マニュアル通りに行かない場合に対する補完業務が発生する。J-stage の運用時間が限定されるため、期日を過ぎた申込や要旨集の受付、PDF ファイルでない投稿等、幾つか発生した。コンピュータの OS 間の不具合や使用するソフトによると思われる、文字等の変換齟齬は順次解決されると期待する。

その他、サービスは多い方がよいが、保育室利用、ネットの使える PC 環境などを用意した。保育室の利用はなかった。

## 2004年度第1回「鳥居基金」 助成実施報告書 (TE 39)

氏名：奥田知明 (慶應義塾大学理工学部応用化学科)

助成：国内研究集会

課題：2004年度日本地球化学若手シンポジウム

提出日：12月4日

地球化学若手会 (地球化学に興味のある自称若手研究者) 主催の「2004年度日本地球化学若手シンポジウム」は、2004年8月5日(木)から8月7日(土)の3日間にわたって、横浜市港北区にあります慶應義塾大学矢上キャンパスを会場として開催されました。本シンポジウムは、発表、討論、及び親睦会を通じて地球化学全分野の研究に携わる学生、若手研究者が活発な交流を行うということを基本理念とし、参加者各位が専門分野・専門分野外の知識を吸収してより広い研究観を養うことを目的とした集会として発展を遂げてきました。加えて、地球化学研究におけるトップの方々を講師に招いての招待講演の開催、またレビュー講演の設置や討論のための時間の拡大など、本集会をより有意

義なものにしようと毎年様々な工夫がなされてきています。また、専門的、客観的な議論を重点化するために口頭発表よりもポスター発表の数を多くし、質疑応答のための時間を充分に取るように配慮しています。2003年度は東京大学本郷キャンパスに112名 (学生86名) の参加者を集めて開催されました。

今年度はシンポジウム開催期間が他学会と重なるなど私の配慮不足により参加者が約60名と昨年度の約半分となってしまいました。参加者を学年別に分けますと、社会人が10名に対し、学生が49名 (博士：13名、修士：24名、学部：12名) であり、若い世代の積極的な参加が見受けられましたが、その反面、博士課程や社会人の方の参加がやや少ない印象を受けました。講演分野としては、地球外物質、有機物、岩石、地殻、堆積物、土壌、環境問題、熱水、温泉、火山、海洋、古環境、陸水、廃棄物処分、分析手法、鉱物、地震、断層、安定同位体、大気、地球環境物質、と少人数ながら分野的には非常に幅広いものとなりました。

本シンポジウムの内容としては、地球化学全分野の理解を深める事を目的として、各分野の第一線でご活躍されている研究者に講演をして頂く「招待講演」及び「レビュー講演」と、若手研究者同士の情報交換の場、学生の発表や質疑応答の訓練の場となる一般講演 (口頭発表・ポスター発表) を用意しました。講演後の質疑応答では、若手が質問しやすい雰囲気作りに努めました。講演内容は、招待講演として徳島大学総合科学部自然システム学科講師の沼子千弥博士による「生物の形成する無機鉱物 生体鉱物の物質科学的特徴」、またレビュー講演として独立行政法人産業技術総合研究所地質情報研究部門の高野淑識博士による「物質と生命の境界：生体分子不斉の起源を探る」をそれぞれご講演いただきました。お二方とも参加者と同世代であり、各分野の基礎から最新のトピックスまでの興味深いお話をわかりやすく紹介して頂き、学生からの質問も多く見受けられました。一般講演については、口頭発表が10件、ポスター発表が26件あり、その内容はバックグラウンドの異なる聴衆にも理解出来るよう創意工夫されており、活発な議論が数多く成されました。ポスター発表には約3時間という十分な時間をとりましたが、間延びすることなく各ポスター前でさかんに議論が交わされていたのは良かったと思います。

若手シンポジウムにおいて非常に重要である懇親会についてですが、1日目は、学位取得者が参加学生に

自らの経験を語る，ということを中心に行いました。2日目は，最近流行の(?)血液型毎のグループに分かれ，地球化学に関するクイズや利き酒大会などのレクリエーションで参加者同士の親睦を深めました。

最終日には「2005年度地球化学若手シンポジウムに向けてのミーティング」を行いました。招待講演・レビュー講演者の沼子さん，高野さんを含む有志17名が集まり，自由な雰囲気の中で，今年度の反省と来年度へ向けての話し合いを約2時間かけて行いました。またこの席で，次回の幹事として川口慎介君(北大院・理)が立候補をし，次回に向けての決意を語ってくれました。川口君は早速，日本地球化学若手会のホームページを新たに作成し，来年度に向けての情報，情報交換用掲示板，コラム，各種お知らせなどの内容を公開してくれています。

<http://wakatekai.hp.infoseek.co.jp/>

本シンポジウムの運営スタッフは，奥田知明(慶大理工)，中川書子(北大院理)，薮田ひかる(Arizona State University)，笹川基樹(北大院理)，井尻暁(北大院理)，土岐知弘(東大海洋研)，神谷奈津美(東大院理)でした。慶應義塾大学理工学部応用化学科環境化学研究室の学生諸君には，シンポジウムの準備から当日の運営までお手伝いいただきました。ここに記し感謝いたします。最後になりましたが，本シンポジウム開催のための補助を決定して頂きました日本地球化学会に深く感謝致します。有り難うございました。

## 2004年度第1回「鳥居基金」 助成実施報告(TE 40)

氏名(所属): 原田尚美(海洋研究開発機構 地球環境観測研究センター 地球温暖化情報観測 研究プログラム 古海洋環境復元グループ)

助成: 国内研究集会

課題: 第四回地球システム・地球進化ニューイヤースクール(NYS IV)

提出日: 2005年1月31日

### 1. はじめに

2005年1月に開催した第4回スクールは，今年度の日本地球化学会「鳥居基金」の援助のおかげをもちまして盛会に開催することができました。ここに事務局を代表しまして，心よりお礼を申し上げます。尚，企

画全体については以下のWWWページをご参照ください。

URL:<http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~earth/school/2004/3rdcircular.html>

### 2. NYS 発足の経緯と目的

地球化学，古海洋学，生物地球科学，岩石学，堆積学，固体地球物理学などの分野の若手中堅研究者有志の間で「21世紀の地球科学を考える会」を2001年に発足させた。この会の活動主旨は，1)明確な研究目標と問題意識をもって広い分野を包括し，社会の要望も見つめながら，研究プロポーザルを作り実行していく資質，2)輸入型サイエンスではなく日本が世界をリードするようなサイエンスを生み出す資質，3)海外の研究者と互角に渡り合える資質等を備えた，次世代を担う若手研究者や学生の育成にある。そこで，全国の若手研究者，院生，学生を集めて「地球システム・地球進化ニューイヤースクール(NYS)」を21世紀の地球科学を支える若い世代の交流・学習の場という位置づけで開催してきた。

我々地球科学の研究者たちの研究対象は地球である。この巨大で複雑な「システム」の過去から現在そして未来にいたる「進化」を研究している。これからの地球進化・地球システムを理解していくには，特定の分野の視野のみではなく，広い視座と先鋭化された専門性の両面を持つことが不可欠である。専門性をこのような短期間のスクールで養うことは不可能であり，大学等研究・教育機関での地道でねばり強い研究と教育に任せるものの，スクールの主目的は，広い視座を養うことと自分の専門ではない分野の基礎知識や自分の専門分野の最新的话题を集中的に教授することにある。また，もう一つの重要な目的は「場」の提供である。スクールの参加に年齢制限はない。様々な興味と専門をもつ研究者たちが，分野の垣根をこえて交流し，今後の日本のサイエンスをより発展させていくために，今後何を研究すべきかという目標を見つけ，討論する場であること，それがスクールの持つ重要な目的，意義である。

### 3. NYS IV 概要

第4回NYSは，2005年1月6日～7日につくばで行われた。本企画主催は「21世紀の地球科学を考える会」であり，海洋研究開発機構地球内部変動研究センター，同地球環境観測研究センター，産業技術総合研究所，高知大学海洋コア総合研究センターの各機関が共催し，日本地球化学会(鳥居基金)，日本地球掘削

科学コンソーシアム（J-DESC）の後援により開催された。

参加者総数は113名（職員49名，PD 19名，学生総計45名）であった。学生内訳は博士院生16名，修士院生14名，学部生15名，男女比内訳は，男84名（74%），女29名（26%）であった。今回はテーマを気候変動中心に絞ったせいも，昨年（180名強）より参加者は減少したが，年々女性参加者の比率が高くなっている。参加登録者の専門分野については，古海洋学，現代海洋，モデル，アストロバイオロジーなど多方面に渡り様々な階層が参加した。ニューイヤースクールは，次世代の地球科学者を生み出す温床として専門分野別の学会にはない重要な役割を果たしているだろう。

スクールのメインテーマを「Past and Modern: Bridge to the future Earth 過去と現在：未来への架け橋」とした。現代および過去の地球の何がわかれば将来の地球の姿を推測する事につながるのか？を念頭に置き，1）気候変動メカニズムを知る，2）地質学的記録から気候変動を議論する（テクニク，問題点の列挙），3）モデリングの実際（よく復元できるところ，できないところ）を柱に各レクチャーを企画した。また，これまでの3回のスクールの反省点として質疑応答に時間が足りないという要望に答えるべく，2日間とも午後の2時間を費やしてじっくりと質疑応答・議論をすることにした。

具体的には，現在の気候変動システムの明らかにされている点，まだよくわかっていない点の理解に努めるため，気候変動のシグナルが大きな振幅を持って最も顕著に現れるであろう高緯度域に焦点を当て，「極域，海氷域の物理」，「極域の大気物理」，「高緯度域の大気 海洋変動にตอบสนองする生物」，「海洋内物質循環」のレクチャーを企画した。

一方，過去の気候変動，地球環境変動の最前線研究に触れるために，10年スケールから億年スケールまで気候変動史～地球史にまたがる時間スケールで生じてきた環境変動の実態把握，その駆動要素とそれに対する応答の仕組みについて詳細に学べるレクチャーを企画した。また，午後の質疑応答の時間では，各レクチャーの中で説明しきれなかった部分の続きを行ったり，まだよくわかっていない点や次に何を明らかにする必要があるのかなどが議論された。時間の短い通常の学会発表では聞く事の出来ない部分を紹介してもらうことで，学生達が未開拓部分や新たな研究の種を探す事に役立ったのではないかとと思う。

今回のスクールの参加者アンケートで印象的だったのは，参加者が自分とは異分野のレクチャーから「他分野の知識を身に付ける」ことが出来た事に喜んでいてのみならず，午後のサイエンスディスカッションの中で異分野の人がする見方の異なった質問に感銘を受ける人が多かったことである。このニューイヤースクールに参加することで，多角的な角度からの質疑応答そのものに触れることができる。これは，専門分野にとらわれない独創的な発想力を養う上で有意義なことなのではないかと感じた。

また，開催期間中，喫茶コーナーにポスターの展示スペースを用意し，国内，国際研究プロジェクトの紹介，各研究・教育機関の紹介，各研究室の紹介，大学院生等の募集，共同研究の呼びかけや論文投稿から審査を経て印刷されるまでの流れを紹介した。

夜は事前アンケートで議論してみたい企画を募り，前回に引き続きサイエンスを取り巻く環境を考えるために「サイエンスとともに生きる」をテーマに議論を行った。

#### 4．実施体制

21世紀の地球科学を考える会コアメンバーを中心に，スクール開催事務局を構成。事務局は，全体統括，つくば事務局，レクチャー企画部，アドバイザーから構成されている。

##### \*全体統括

坂本竜彦@IFREE/JAMSTEC（NYS 責任者），原田尚美@IORGC/JAMSTEC（NYS 会計，本申請者），池原実@高知海洋コアセンター（NYS 監査）

##### \*つくば事務局

中島礼@AIST（現地責任者），大串健一@茨城大，大村亜希子@東大海洋研，黒柳あずみ@AIST，大山広幸@筑波大

##### \*レクチャー企画部

岡崎裕典@東大・海洋研，青木かおり@AIST，阿波根直一@北大，阿部彩子@東大，FRGC/JAMSTEC，飯島耕一@IFREE/JAMSTEC，板木拓也@東大・PD，伊藤雅史@IFREE/JAMSTEC，入野智久@北大・地球環境研，内田昌男@IORGC/JAMSTEC，江口暢久@IODP-SAS，大河内直彦@IFREE/JAMSTEC，小栗一将@IFREE/JAMSTEC，金松敏也@IFREE/JAMSTEC，木元克典@IORGC/JAMSTEC，斉藤実篤@IODP-SAS，IFREE/JAMSTEC，坂井三郎@IFREE/JAMSTEC，阪口秀@IFREE/JAMSTEC，佐藤暢@専



修大, 菅寿美@IFREE/JAMSTEC, 千秋博紀@IFREE/JAMSTEC, 谷篤史@大阪大, 土屋正史@極限/JAMSTEC, 豊福高志@IFREE/JAMSTEC, 中川毅@NEWCATSLE, 西川徹@AESTO, 萩野恭子@北大・COE, 長谷川拓也@気象研・PD, 久光敏夫@IFREE/JAMSTEC, 平野聡@IFREE/JAMSTEC, 堀和明@名城大, 松本公平@IFREE/JAMSTEC, 三浦英樹@NIPR, 山口耕生@IFREE/JAMSTEC, 吉山泰樹@東大・海洋研・院生, 渡辺剛@北大

\*アドバイザー

川幡穂高@AIST, 北里洋@IFREE/JAMSTEC, 池原研@AIST

5. 成果物

NYSIV レクチャーノート (2004年12月 発行):

NYSIV 参加者に配布

6. 参考資料

NYSIV レクチャータイトル一覧\*

**2004年度第2回「鳥居基金」  
助成実施報告 (TE 43)**

氏名 (所属): 角野浩史 (東京大学大学院理学系研究科・地殻化学実験施設)

助成: 海外渡航 (チリ)

課題: IAVCEI General Assembly 2004 (国際火山学地球内部化学協会2004年総会) に参加・発表

私は本基金の助成を受けて, 2004年11月14日から19日にかけてチリ・プコン市で開催された IAVCEI General Assembly 2004 (国際火山学地球内部化学協会2004年総会) に参加し, 研究発表を行った。IAVCEI は火山と, 火山を通じた地球内部化学に関する研究分野を包括する世界最大かつ最高水準の国際研究学会であり, 今年の総会には全世界から900人を超える多数の研究者が参加し (うち日本人は70名弱), 6日間にわたり活発な研究発表・議論を行った。また総会の前後には, 開催地近隣の火山などを対象とした地質・火山学巡検が行われることが恒例となっているが, 今回は日本と並ぶ世界有数の火山国であるチリでの開催とあって, 内容の濃い巡検が多数行われた。なかでも総会前に行われた, El Laco 磁鉄鉱床で有名なラコ火山の巡検は, 標高5000 m 近い高地に赴く過酷なものだったが, 日本人研究者数名も参加し, 高山病に苦しみつつもずっしりと重い磁鉄鉱溶岩の標本を持ち帰ったと聞いている。

私は, 筑波大・安間了氏, 東大・岩森光氏, 東大・

\*NYSIV レクチャータイトル一覧

レクチャー	タイトル	講師(敬称略)	所属
A	気候・海洋変動における極域・海氷域の役割	大島慶一郎	北海道大学低温科学研究所
B	「夏の北極振動」夏季の大気大循環の新しい見方	立花義裕	東海大学総合教育センター
C	大気循環と海洋表層生物生産 亜寒帯縁辺海ベーリング海	斉藤誠一	北海道大学大学院水産科学研究科
D	長期的な物質循環と地球環境変動: 固体地球との関連性	田近英一	東京大学大学院理学系研究科
E	千年規模の急激な気候変化 ~ D-O サイクル ~	酒井孝太郎	海洋研究開発機構地球環境フロンティア研究センター
F	Clathrate Gun Hypothesis by J.P. Kennett とその周辺	棚橋 学	産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門
G	気候変動の Driving Force	中川 毅	ニューカッスル大 (英国) 地理学教室
H	現代海洋と古海洋のはざま セディメントトラップ実験による沈降粒子観測	岡崎裕典	東京大学海洋研究所
I	氷期サイクルはなぜ生じたか? : 気候 / 氷床モデリング最前線	阿部彩子	東京大学気候システム研究センター / 海洋研究開発機構
J	地形地質学的方法と相対的海水準変動データによる第四紀後期の南極氷床変動史の復元 地球環境変動に果たす南極氷床の役割	三浦英樹	情報・システム研究機構 / 国立極地研究所

折橋裕二氏らを中心とするチリ・パタゴニア研究グループの一員として、南米のパタゴニアの玄武岩台地を形成した大規模火成活動の成因に関する研究を行っている。本研究グループは、海嶺の沈み込みが現在進行中の南部アンデス弧を対象として、海溝 海溝 海嶺型三重点近傍の広域的な火成作用とテクトニクス、すなわち大陸地殻成長のメカニズムの全貌を明らかにするべく、精力的に研究を進めてきた。その構成員にはチリ及びアルゼンチンの研究者や、ブラジル在住の日本人研究者など、現地の研究者も多く含まれている。今回のチリ滞在中に彼らと会い、これまでの研究成果と今後の計画について議論できたことは大変有意義であった。パタゴニア南部の火成活動の起源はこれまで、海嶺の沈み込みによって開いたスラブウインドウを通過して上昇したブルームと考えられてきた。私の研究発表はこの火成活動の成因に希ガス同位体から制約を加えたものであったが、現地研究者だけでなく同様の背弧域火成活動に関わる研究者からの反響も大きかった。研究グループとしても4件の発表の他に、参加者全員に配布された国際紙 *Revista Geologica de Chile* の特集号に我々の論文が掲載されるなど、十分に研究成果をアピールできた。

今回の IAVCEI 総会はこれまでで最大の規模となったため、どの講演会場も満員だったほか、国際親善のサッカー大会が催されるなど（私も参加した日本チームは残念ながら初戦敗退に終わったが）大変な盛況で、最終日の真夜中まで続いたダンスパーティーで幕を閉じた。学会終了後は近隣のビジャリカ、ジャイマ、そしてロンキマイ火山を訪れる巡検に参加した。標高3000 m クラスの火山から流れ出た膨大な量の溶岩や火砕流堆積物と、その裾野に広がる、中生代の姿を今に残すアラウカリア（ナンヨウスギ）の森が形作る、日本とは時代さえも異なるのではと錯覚するほどの壮大な景色が印象的であった。

最後に、日本から最も遠く、行くことさえ二の足を踏む南米大陸で貴重な経験を得た今回の IAVCEI 総会に参加するに当たり、援助していただきました日本地球化学会と関係者各位に深く感謝いたします。ありがとうございました。

## 日本地球化学会

### 2004年度第3回評議員会議事録

日時：2004年9月19日(日) 16:00~21:45

場所：静岡市・グランシップ901会議室

出席者：田中剛会長・松田准一副会長・赤木右・蒲生俊敬・山本綱志・鍵裕之・中井俊一・川幡穂高・米田成一（以上幹事）、北逸郎、和田秀樹、塚本尚義、奈良岡浩、宗林由樹、村江達士、横内陽子、河村公隆、海老原充、清水洋、長尾敬介、渡久山章、植田千秋（以上評議員）脇田宏（監事）

1. 2005年地球化学会年会（琉球大学）準備委員長の渡久山章会員を追加評議員として承認した。

2. 2004年度第2回評議員会議事録の承認を行った。

3. 報告事項

3.1 庶務（山本幹事）：【庶務一般】平成16年度科学研究費補助金（地球化学公開講演会「駿河湾から地球が見える」）交付申請（6/16）、平成16年度科学研究費補助金（GJ）交付請求（6/30）、平成16年度科学研究費補助金「データベース」に申請（9/17）。

【研究助成等】2004年第2回鳥居基金海外渡航に5名の申請があり、現在鳥居基金選考委員会（長尾敬介委員長）にて審議中。【後援・共催等】協賛（日本地球化学会、平成16年学術講演会12/1~3：日本化学会メスパウアー分光研究会、第7回メスパウアー分光研究会講演会11/1）。共催（地球惑星関連学会連絡会、2005合同大会5/22~26、プログラム委員として鈴木勝彦会員、角皆潤会員、下田玄会員を報告）。推薦依頼（「注目科学技術領域の発展シナリオ調査」シナリオライター推薦依頼（文部科学省科学技術政策研究所ならびに(財)未来工学研究所）に対し前川竜男会員と鈴木勝彦会員を推薦）。【幹事会】2005年9月11日13:00~18:00。出席者：田中会長、松田副会長、鍵、中井、蒲生、赤木、山本各幹事。第3回評議員会の議事内容について整理した。

学会事務センター破産の対策を練るために8月27日に拡大臨時幹事会を行った。学会事務センターからのデータ引き上げなど残務の処理、学会事務センターに代わる依頼先の候補としての国際文献印刷社について田中会長より説明があった。

3.2 会計（鍵幹事）：【学会事務センターへの預け金について】破産した学会事務センターへの預け金について説明があった。9月27日に事務センターの帳簿受け渡しが予定されており、現段階では明確な損害額は分からないが、学会事務センターへの預け金すなわち損金は1,807,511円から2,562,709円の範囲になる見通しである。2003年度決算について、脇田

宏監査から承認を受けた。

### 3.4 編集

3.4.1 GJ (赤木幹事): Geochemical Journal の出版状況 (Vol. 38 No. 3 を 6 月 5 日, No. 4 を 8 月 20 日に出版, No. 5 は 10 月上旬 No. 6 を 12 月上旬出版予定) が説明された。なお, No. 6 については故野崎義行会員の Memorial issue とする予定である。また, J-Stage での GJ の公開方法として, 発行後 2 年間は要旨のみの公開との説明があった。コペンハーゲンにて, 海外より 5 名, 日本より 9 名の出席により拡大編集委員会を開催した事の報告があった。出版前で校正刷りができた段階に on-line 公開が可能かどうか検討することとなった。

3.4.2 地球化学 (蒲生幹事): 地球化学の出版状況 (38 巻 2 号を 6 月 5 日, 3 号を 8 月 20 日に出版, 4 号は「サンゴ骨格の地球化学」特集号とし 12 月に発行予定) が説明された。印刷ページ数が 38 巻 1 ~ 3 号で 201 ページに達し, 昨年 (183 ページ) - 昨年 (189 ページ) をすでに超過していること, 2005 年の最初の号 (39 巻 1 号) に特集「沿岸海底湧水の地球科学」を計画していることが説明された。

3.4.3 ニュース・HP (米田幹事): ニュースの出版状況 (No. 177 を 6 月, 年会プログラムを含む No. 178 を 8 月 20 日に発行) が説明された。年会の講演申し込み・要旨受付は J-stage を利用したが, 要旨投稿の際の受付番号・パスワードを忘れたなどの問い合わせが最も多く, 30 件近く寄せられたと報告された。

3.5 行事 (川幡幹事): 【地球惑星関連学会連絡会】来年度の合同大会のプログラム委員として, 地球化学会から鈴木勝彦会員, 角皆潤会員, 下田玄会員を推薦した。2005 年年会は, 9 月 26 日から 30 日の間の 3 日間で開催し, 渡久山章会員が準備委員長を務めるとの報告があった。【年会の準備状況】(和田評議員) 年会は予定通り開催の運びと報告された。ただし, 申し込みにあたり手数料についての問い合わせが多数あった旨報告があった。

3.6 各種委員会: 【鳥居基金選考委員会】(長尾委員長) 以下の 3 名に助成を決定した旨報告。海外渡航・永島一秀会員 (第 36 回月惑星会議), 則末和宏会員 (インド洋南の南極海における微量金属元素の観測), 角野浩史会員 (国際火山学地球内部化学協会 2004 年総会) を採択した旨報告され, 海外派遣助成の要件について意見を求められた。応募要領の改

訂を委員会で行う。【将来計画委員会】(松田委員長) 20 日(月) 夜間小集会を行うので, 多数の方に集まって頂きたい。

3.7 【IAGC 報告】清水評議員より, 野津会員が IAGC 評議員に加わったこと, IAGC が International Association of GeoChemistry に改称されたこと等が報告された。【学術会議】清水評議員より, 日本学術会議会員候補者選考委員会に関して報告があった。【研連報告】清水評議員より「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」および「地球化学における環境学」について現在集計中であると報告があった。蒲生評議員より第 19 期第 4 回海洋科学研連議事録(案)に基づいて報告があり, 「Ocean Science」関係の科研費細目要求の動きがあると報告された。塚本評議員より第 19 期第 2 回惑星科学研連議事録(案), 田中会長より第 19 期第 3 回鉱物学研連・鉱床学専門委合同会議議事録(案)・第 19 期第 1 回大気・水圏科学研連陸水専門委議事抄録(案)の報告・第 19 期第 2 回大気・水圏科学研連陸水専門委議事抄録(案)に基づいた報告があった。

#### 【その他】

3.8 その他: 【合同学会地学教育委員会】瀧上委員より年会期間中に「地球化学から見た地学教育・理科教育問題」集会の案内があり, 田中会長が紹介を行った。

### 4. 審議事項

4.1 学会事務センターの倒産による学会の対応について

田中会長より, 事件発生から時系列に従って学会事務センター破産と本会の対応について説明がなされた。この流れを記述した説明文を総会で印刷・配布することを了承した。

4.2 会務委託先と会則変更の提案

田中会長より, 国際文献印刷社との契約書(案)ならびに来年度と今年度の見積もりについて説明があり, 色々な質疑を経て, 学会業務を国際文献印刷社に委託すること, 会則 17 条を以下に変更することの総会における提案を承認した。

「本会の事務所は東京都新宿区高田馬場 4 丁目 4 番 19 号(株)国際文献印刷社におく。」

4.3 2004 年度中間事業報告と会計中間報告ならびに 2005 年度事業計画案と予算案

山本庶務幹事・鍵会計幹事より中間報告ならびに事業計画案と予算案の説明があり, 種々の訂正を加

えた後、承認した。

4.4 4～6月の会員の異動について(4月1日～6月30日)以下の異動を承認した。

【入会】

(4月)

正会員3名(一般正会員1名, 学生2名)

2313 井岡聖一郎 IOKA Seiichiro  
核燃料サイクル開発機構東濃地科学センター瑞  
浪超深地層研究所超深地層研究グループ

以下学生

2311 板井啓明 ITAI Takaaki  
岡山大学固体地球研究センター

2314 堀井勇一 HORII Yuichi  
産業技術総合研究所環境管理研究部門

(5月)

正会員4名(一般正会員4名)

2315 則末和宏 NORISUE Kazuhiro  
京都大学化学研究所

2316 加藤和浩 KATO Kazuhiro  
東京大学原子力研究総合センタータンデム加速  
器研究部門

2317 小木曾哲 KOGISO Tetsu  
海洋研究開発機構固体地球統合フロンティア研  
究システム

2318 高野淑識 TAKANO Yoshinori  
産業技術総合研究所地質情報研究部門

(6月)

正会員8名(一般正会員1名, 学生7名)

2326 蓑島佳代 MINOSHIMA Kayo  
産業技術総合研究所

以下学生

2319 国岡大輔 KUNIOKA Daisuke  
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻

2320 内田麻美 UCHIDA Asami  
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻

2322 近藤宏壮 KONDO Hiroaki  
広島大学大学院生物圏科学研究科環境循環系制  
御学専攻

2323 佐久間英輔 SAKUMA Eisuke  
東京薬科大学大学院生命科学部

2324 関本 俊 SEKIMOTO Shun  
京都大学大学院工学研究科物質エネルギー専攻

2325 白井厚太郎 SHIRAI Kotaro  
東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻

2327 萬福真美 MAMPUKU Mami  
九州大学大学院比較社会文化学府国際社会文化  
専攻

寄贈会員

2321 Accessions Unit, CAB Internat'l

【変更】

(4月)

学生会員 一般正会員 3名

2112 天羽美紀 2119 金山晋司 2187 渡邊隆広

(5月)

学生会員 一般正会員 2名

2131 野田雅一 2272 伊藤正一

(6月)

一般正会員 シニア会員 1名

714 山本俊夫

一般正会員 国内 海外 1名

1863 豊田賢二郎

学生会員 一般正会員 国内 海外 1名

2170 中嶋大輔

2004年6月30日現在の会員数

	正会員(一般正会員)	(学生)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	(在外)
204.3.31	965	(836)	(119)	(10)	13	13	991 (39)
入会	15	(6)	(9)				15 (0)
退会	0	(0)	(0)				0
変更		(+6,-1)	(-6)	(1)			0 (2)
2004.6.30	980	(847)	(122)	(11)	13	13	1006 (41)

【会費滞納会員の除名の承認】

2003年第2回の評議員会で、2年以上の滞納者は除名されることが決定され、2004年第2回の評議員会で今年度は移行期間として、4・5年の滞納者を除名することに決めた。それを受けて海外会員に対しては7月末日、国内会員に対しては8月6日までの期限を設けて滞納会費の支払いを促し、期限までに未納の場合は除名する旨を伝えしたが以下の会員は滞納会費の支払いが無いため除名を決定した。

【正会員】

一般正会員

(国内) 王紅猷, 熊澤一正, 薦田康夫, 諏訪成雄, 佐藤長治, 川村嘉勝, 山根雅之, 中林成人, 佐藤久夫

(海外) LIN SAULWOOD, 劉永忠, JAYANTA KUMAR PATI, LEE KWANG SIK, SCHROLL

ERICH, FREY M., CHANG HO WAN, 梁漢燮  
学生会員

(国内) 山崎光浩, 江口暢久, 原和之, 倉本敏克,  
占部太一郎, 三輪達也, 岩倉一敏

(海外) 申昶勲

#### 4.5 Geochemical Journal ならびに地球化学の J-Stage 公開について

平成17年度より Geochemical Journal を J-Stage に公開するため、電子化経費として30万円を予算に組み入れることを決定した。地球化学についても J-Stage に公開する方向で検討を進めるが、電子化経費に関する情報がまだ十分でないので、平成17年度は公開しないこととした。

#### 4.6 連携のあり方に関する WG について

地球惑星科学関連合同学会に関連した学会長懇談会から要請のあった「連携のあり方に関する検討ワーキンググループ」がこの夏に2回開催された。そして、(a)日本学術会議や総合科学技術会議等の公的機関及び社会一般からの地球惑星科学コミュニティへの諸要請の受け手としての機能、及びコミュニティの意見を集約して対外的に発信/公開していく機能、(b)地球惑星科学に関わる国際学協会や国際プロジェクト等への対応機能、(c)地球惑星科学に関わる研究成果の発表及び情報交換のため、地球惑星科学合同大会や国際会議等を企画・運営・開催する機能、(d)地学教育の在り方、地球観測の推進方策、将来的な地球惑星科学発展の方向など、地球惑星科学コミュニティ共通の問題の検討を行う機能、(e)その他、地球惑星科学の総合的発展を目的とした諸活動を推進する機能を有する組織の設立を検討する「地球惑星科学連合(仮称)」設立準備会を本年9月に立ち上げることが提案された。本件について、本組織の全体の趣旨に賛成するとともに、日本地球化学会として設立準備会に参加することが了承された。

#### 4.7 Elements の共同出版に関して

田中会長より Elements 参画に対して説明があったが、情報が十分ではないため結論に至らなかった。Elements は固体よりの雑誌であるため、日本地球化学会全体としては購読に参加する方向で意見をまとめることは難しい。また、購読を希望するであろう会員の多くはすでに Mineralogical Society of America, Geochemical Society の会員となっていることが予想されるため、日本地球化学会として

参画することに意味があるか明確でない。しかし本学会の国際化に寄与することが予想できる。会員一人あたり1~2ドル相当の支払いで電子版を受け取ることが出来るかを問い合わせる。当面、仲介の鉱物学会・村上教授には情報が十分でない旨を返事することとした。

#### 4.8 2004年度総会議事次第について

議事内容の確認を行った。

#### 4.9 委員の改選：学会賞選考委員、鳥居基金選考委員の選挙

選挙の結果、以下の通りになった。【学会賞選考委員】野津憲治(16票)・佐野有司(8票)・植松光夫(6票)、補欠：田中剛・海老原充・日下部実(4票)、来年度の委員長は佐野会員にお願いする。【鳥居基金選考委員】蒲生俊敬(6票)、補欠：野尻幸宏(4票)

#### 5. 今後の評議員会・幹事会の予定

- ・2005年度第1回幹事会：2月5日(土) 3時から山上会館
- ・2005年度第1回評議員会：2月12日(土) 13時から山上会館

### 第19期海洋科学研究連絡委員会 (第5回) 議事録

日時：平成16年11月8日(月) 14時~17時

出席者：谷口旭, 蒲生俊敬, 植松光夫, 中田薫, 佐藤義夫, 竹内謙介, 山口征矢, 伊藤絹子, 前田明夫, 新野宏, 松山優治, 川辺正樹, 友定彰, 池田元美, 古谷研, 徐 垣

欠席者：北村佳照, 磯部稔, 寺崎誠, 高橋正征, 瀧岡和夫, 松田治

場所：日本学術会議第6部会議室

#### 前回議事録について

事前にメールで回覧し、必要な修正を施してあった、第4回海洋科学研究連絡委員会(平成16年6月7日開催)の議事録案を承認した。

#### ・報告事項

##### (1) 日本学術会議 関連(谷口委員長)

学術会議法の一部を改正する法律案の承認を受けて、現在、内部のしくみの検討が進んでいることについて報告があった。概要は以下の通りである。

210名の会員を選出するための選考委員会が発足

し、委員30名が黒川会長より任命された。これまでに5回の委員会が開催されている。委員長には吉川弘之前会長が選出され、運営規則の審議、会員候補者の選考に関する体制作り、情報の収集体制など、協議が行なわれている。

学会会議は3部制に変わり、今後の学会会議の在り方はこれまでと大きく変わることが予想されるので、“日本学会会議の新しい体制の在り方に関する懇談会”を作り検討することとなった。6名の委員が選出されており、ここでは、連携会員のあり方、国際交流活動のありかた、学術団体との連携のあり方、政策提言機能発揮のありかた、幹事会への権限委任事項、部会の位置付け、委員会の役割などが検討される。

第990回運営審議会で科学技術基本計画レビュー委員会を設置し、科学技術基本計画レビューのグランドデザインの作成、重要な課題については総合科学技術会議へ提言することなどが検討されることになっている。

(2) SCOR 関連（蒲生委員）

SCOR 総会について報告があり、概要は以下の通りである。

SCOR 総会は2004年9月にヴェニスで開催され、日本からは谷口委員長（SCOR 副会長）と蒲生委員が出席した。

執行委員（会長、副会長3名、その他）の改選が行われ、会長、副会長の選出が行なわれた。会長にはカナダの Bjorn Sundby 氏が、新任の副会長にはロシアの Victor Akulichev 氏が選ばれて、現副会長の谷口旭氏は再任された。

今年提案されていた3件のワーキンググループ（以下の3課題）の採否決定が行なわれ、

1. アラビア海における中深層魚類資源
2. 海洋生態系におけるウィルスの役割
3. 動物プランクトン・タイムシリーズの国際比較

これらのうち1は不採択であったが、2、3は採択された。

大規模国際協同研究計画についての報告と議論があり、特徴のあるよい研究活動がなされているとの評価があった。

予算状況についての報告のあと、分担金の増加についても協議された。カテゴリー1、2は現状維持であるが、カテゴリー3、4、5については

1%の増加になる予定である。日本は5であるので増加することになる。

その他、発展途上国への支援、IPY や、SCAR についても密接な連携を保ち支援することが確認された。

今回は、来年8月に、オーストラリアのケアンズで執行理事会が開催される予定であり、総会は2006年にチリで開催される予定である。学会会議では代表派遣申請の手続きの締め切りが迫っており、次回も蒲生委員に出席していただくことで了承された。谷口委員長の旅費については SCOR が負担する予定である。

(3) 平成18年度科学研究費補助金に係わる「時限つき分科細目の設定」について（谷口委員長）

平成18年度科学研究費補助金に係わる時限つき分科細目の設定に関して、以下の通り報告があった。

科研費の時限つき分科細目の設定について、学術体制常置委員会より検討依頼があったが、時間の関係から、メールによる配信、意見交換が行なわれた。その結果、複合新領域の分科「環境学」、細目「海洋環境学」として要望することになり、谷口委員長が要望書を作成して提出した。

(4) SOLAS 関連（植松委員）

今年10月にカナダで、オープンサイエンスミーティングが開催されたこと、来年は東京で開催予定であり、シンポジウムを計画していることが報告された。

(5) 大学の法人化後の予算に関する話題（山口委員）

全国の国立大学は今年度から独立行政法人として発足したが、様々な面において、これまでとは違った状況がうまれているとの情報が何人かの委員から出された。そのひとつの事例として、東京海洋大学の情報提供があった。

東京海洋大学では船舶をもっているために、その船舶保険として、かなりの高額を支出することになる。しかし、船舶保険の予算も一般予算の中に組み込まれていることから、学内の実質的な予算は大幅な削減になり、大学運営は予想以上に困難な状況におかれていることが報告された。そのほか、乗船する学生の保険の問題などもあり、今後検討してゆく必要があるなど種々意見が出された。

(6) 研究連絡委員会の動向（川辺委員）

研究連絡委員会の動向に関する情報として、以下のような報告があった。

来期からの新学術会議では、研連が廃止されて分野別委員会と課題別委員会になるが、委員会の数は現在の研連より大幅に減らされる。地球惑星科学全体で一つないし二つの分野別委員会になると予想されるので、地球物理学研究連絡委員会と関連学協会は、地球惑星科学合同大会運営機構の実績を生かして地球惑星科学関連の窓口組織を作ろうとしている。また、“水”をキーワードにした課題別委員会の実現を目指す委員会を立ち上げようという動きもある。

#### ・協議事項

##### (1) 代表派遣候補者について

先の報告事項にもあるように、来年8月のSCOR執行理事会に蒲生委員が出席することを申請することで承認された。

##### (2) 19期における検討内容をとりまとめた報告書の作成について

研究連絡委員会の对外報告の取り扱いに関する留意事項について、以下のような説明があった。

科学者コミュニティは何ができるか、自分達の社会に対する責任は何かということが提案されなければならない。すなわち、提案するにあたっては十分な吟味が必要であり、現実としてはひじょうに難しいことであるとの認識をもたなければいけない旨の申し合わせが、運営審議会において確認されている。

##### (3) 我国における海洋科学の研究と教育の推進体制について

第18期からの申し送りの一つであった“海洋科学の研究と教育の推進体制”に関しては、研連での討議を加えて、一つの筋道にまとめた資料を作る必要性が指摘されてはいるものの、对外報告として提案する場合には、難しい面もある。これまでも何度か自由討論を行ない、議論を重ねてきているので、それらを資料として委員長がたたき台を作成することで承認された。

次回は2月21日開催の予定

(議事録作成・伊藤絹子)

### 第19期第4回地球化学・宇宙化学 研究連絡委員会議事録

日時：2004年11月19日(金) 13:30～16:00

場所：日本学術会議第6部会議室(6階)

出席者：山中高光(会員)、蒲生俊敬(地球化学)、佐野有司(地球化学)、清水洋(地球化学)、下山晃(化学)、鈴木徳行(地質)、留岡和重(鉱物)

欠席者：海老原充(地球化学)、長尾敬介(地球化学)、中村栄三(岩鉱)、平原和郎(地球物理研連)

#### 報告事項

##### 1. 学術会議関係

##### (1) 第143回総会(平成16年10月26～28日開催)(山中会員)

次の項目について審議・報告があった。

##### (i) 第三次科学技術基本計画に向けた日本学術会議の役割について

第一次(平成8年7月2日)、第二次(平成13年3月30日)について、平成18年に向けて検討を加えていく。

##### (ii) 次期日本学術会議への提言について

##### (iii) 日本学術会議と学術研究団体のホームページのリンク

関連各学協会において確認する。

##### (iv) 運営審議会報告：持続可能な社会のための科学と技術に関する国際会議2005組織委員会の設置

##### (v) 学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会有識者6人と会長で組織し、次の事項を検討。

国際交流活動の在り方(国際学術団体の国内対応委員会の在り方)、学術研究団体との連携の在り方(連携学術団体制度、分野別委員会の編成)、政策提言機能発揮の在り方(総合科学技術会議との関係、課題別委員会の編成)、部会の位置付け、委員会の役割・構成・編成。

##### (vi) 学術会議会員候補者選考委員会

会員候補者選考委員(30名)が選定され、会員候補者情報について学協会の提供を依頼している。また、専門委員候補者の範囲について審議している。

##### (2) 第4部会(平成16年10月26～27日開催)(山中会員)

##### (i) 平成18年度科学研究費補助金に関わる時限付き分科細目の設定

地質学研連からの「地球システム変動」を提案した。

- (ii) 物理学研連と結晶学研連において「SPring 8の利用者負担の在り方について」が提案され、学術会議提言に向けて準備中である。
- (iii) 国際惑星地球年 (International Year of Planet Earth, IYPE)
  - 国際地質科学連合 (IUGS) はユネスコ及び各国地球科学関連団体と共同し、2005年から2007年にかけて実施する。国連総会において2006年をIYPEの年とする宣言が採択される。
- (iv) 代表派遣会議及び派遣候補者の推薦について
  - 平成16年度追加推薦と平成17年度の推薦について連絡があった。
- (3) 第143回総会への研連報告 (清水委員長)
  - 第143回総会において地球化学・宇宙化学研連の活動を報告するため、前回総会以後の活動をまとめた資料を作成し、事務局宛に提出した。
- (4) 平成18年度科学研究費補助金「分科細目・新規設定要望の検討依頼について」(清水委員長)
  - 本研究連絡委員会としては新規設定の要望をしなかったことが報告された。
- (5) 科学研究費補助金審査委員選考方法変更について (清水委員長)
  - 日本学術振興会が各学協会からの研究者情報の提供などにより独自の研究者データベースの充実を図り、同会内に設置した学術システム研究センターを中心として審査委員候補者の選定を行なうとの変更について、学術会議学術体制常置委員会から連絡があった。関連学協会へ、本変更について連絡を行なった。
- 2. IAGC (清水委員長)
  - 本研連が国内対応団体となっている国際学術組織 IAGC (International Association of Geochemistry and Cosmochemistry) の評議員会 (Council Meeting) が8月20日、フィレンツェ大学 (イタリア) で開催され、野津憲治・第17期本研連委員長が出席した。2004~2008年執行部と評議員が、推薦委員会の原案通り承認され、野津氏が評議員に選出された。IAGCの略称はそのままであるが、International Association of Geochemistry and Cosmochemistry から、International Association of Geochemistry への名称変更と、それに伴う定款変更の提案がされ、可決された。
- 3. Goldschmidt Conference (清水委員長)
  - 第14回会議が、6月5日から11日までコペンハー

ゲン大学 (デンマーク) で開催された。日本地球化学会は、Geochemical Society, European Association of Geochemistry, Mineralogical Society of America とともに主催機関となった。第15回会議は、2005年5月20日~25日にアイダホ大学 (アメリカ) で開催され、日本地球化学会は引き続き主催機関となる。

#### 審議事項

1. 「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」及び「地球化学における環境学」に関するアンケートについて
  - 標記2つのアンケートを日本地球化学会会員に実施し、その集計結果ならびにまとめについて審議した。再度アンケートを実施して回答数を増加して、最終まとめをすることとした。「アジア地域における地球化学・宇宙化学の連携」については、対外報告としてのまとめを検討することとした。
2. 平成17年度代表派遣会議及び派遣候補者の推薦について
  - 希望者は11月25日までに委員長に連絡し、候補者の推薦については委員長、会員、幹事で協議することとした。

#### その他

1. 次回の委員会の日程について
  - 次回の委員会を2005年3月7日(月) 午後1時30分より開催することを決めた。

### 日本学術会議大気・水圏科学研究連絡委員会 陸水専門委員会 (第19期第3回)・議事抄録

日時：平成16年12月27日 15:00~17:00

会場：日本学術会議第5部会議室

出席者：佐倉保夫 (委員長), 鈴木裕一, 谷 誠, 中尾正義 (幹事), 知北和久, 山田正, 吉谷純一 (土研)

#### 議事

1. 地球物理学研連 (第19期第3, 4回目) の報告
  - ・配布資料に基づき、地球物理学研連の活動報告があった。とくに陸水専門委員会から提案した小委員会のうち、トレーサー水文学小委員会、気候変動と人間活動による地下水影響評価小委員会、陸水物理学小委員会の設置が認められ、すでに承認されてい



る雪氷小委員会とあわせて四つの小委員会が設置されたことになる。ただし、陸水専門委員会から提案した地下環境水文学小委員会は承認されず、新規招集理由を見直して提案書を修正ののち再度提案する予定である。これら小委員会は19期の終わり頃（2005年9月）に報告書の提出が求められるであろう。陸水専門委員会の席上でも報告してもらってもいいかもしれない。

## 2. 科研費審査委員の選出方法の変更

・科研費審査委員の選出方式が変更され、学協会が直接学振に情報提供することになったため学術会議（つまり陸水専門委員会としても）はかかわらないことになった。

## 3. 水関連課題別委員会の立ち上げについて

・学術会議の改組に従来の研連や専門委員会の数が減りそうであり、社会環境工学研連、大気・水圏科学研連、水産学研連、農業土木学研連を母体とする水関連の課題別委員会を立ち上げようという動きがあり、そのための準備委員会が設置された。陸水専門委員会からは、佐倉、谷、中尾の3委員が参加している。そのためのアンケート調査等が実施の予定であり、その回答を九州大の楠田先生に返信する際に陸水専門委員会の委員にも流して欲しいとの要望があった。

## 4. 日本地球惑星科学連合の設立について

・配布資料に基づき日本地球惑星科学連合の設立に関する報告があった。

## 5. 今後の活動について

・次回の陸水専門委員会は3月17日の14時から16時にかけて学術会議において開催する。そのとき、陸水専門委員会主催のシンポジウムの方針について議論し、来年度の1回目の会合で決定し、2回目の会合時にシンポジウムを開催するという方針で臨みたい。

## ロレアルアーツアンドサイエンスファンデーション「ロレアル色の科学と芸術賞」公募

色をテーマにして、科学と芸術の新鮮でオリジナルな出会いを実現している具体的な仕事に対する賞です。単体の一論文や一作品、ないしは、ひとつの同じ問題設定やプロジェクトに属する連作や一連の論文群を対象としています。また、ひとつの作品や論文をメインにして、ほかのものを関連リフェランスとして添付することも可能です。

金賞（1人賞金30,000ユーロ（おおよそ400万円））  
銀賞（1人賞金20,000ユーロ（おおよそ270万円））  
銅賞（1人賞金10,000ユーロ（おおよそ130万円））

●応募受付期間：2005年3月31日(木)まで  
●応募資格：科学または芸術の領域の仕事をしている人。年齢・国籍は問いません。（英文での応募となります。）

●問合せ：ロレアルアーツアンドサイエンスファンデーション

東京都渋谷区代々木2-22-5-701

tel. 03-5308-2662, e-mail: lasf@gol.com

ホームページ(英語): <http://www.art-and-science.com/>

## 九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門 太陽惑星系物質科学講座担当教授教員公募

このたび、九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門の太陽惑星系物質科学講座担当教授候補者を下記のとおり募集することになりました。つきましては、関係者への周知について宜しくお取り計らい下さいませすようお願い申し上げます。

### 記

1. 職種・人員：太陽惑星系物質科学講座担当教授 1名
2. 専門分野：無機地球化学（岩石圏・水圏・気圏などの物質の分析により、地球惑星の環境変動や地球生物圏との相互作用を研究し、かつ教育に熱意のある方を希望）
3. 着任時期：平成17年7月以降（決定後なるべく早い時期）
4. 提出書類：
  - (1) 履歴書
  - (2) これまでの研究概要（A4用紙2枚以内）
  - (3) 研究業績リスト{原著論文（査読の有無）、総説、報告書、著書に区分}
  - (4) 主要論文の別刷3編（研究業績リストに 印を付す）
  - (5) 研究・教育に対する抱負（A4用紙2枚以内）
  - (6) 応募者について意見を聞ける方2名の氏名とその連絡先並びに応募者との関係
5. 公募締切：平成17年3月22日(火)（必着）
6. 書類送付先および問い合わせ先：  
〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1  
九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門

太陽惑星系物質科学講座担当教授候補者選考委員会  
委員長 関谷 実

Tel : 092 642 2669 (ダイヤルイン)

Fax : 092 642 2684

E-mail: sekiya@geo.kyushu-u.ac.jp

7. その他：提出書類のうち、(4)以外は全て A4 用紙を使用すること。

封筒に「応募書類在中」と朱書きし、簡易書留で郵送のこと。

選考の最終段階において講演をお願いし、面接を行います。

### 広島大学大学院理学研究科地球惑星システム学専攻教員の公募について

本地球惑星システム学専攻では、新しい地球惑星科学の教育・研究を目指し、教員とスタッフが日夜研鑽を重ねておりますが、この度、本専攻の力量をさらに充実するために下記の要領で教員を公募いたします。つきましては、関係者への周知および適任者の推薦につきましてご配慮下さいますようお願いいたします。

#### 記

1. 職種および人員：教授 1 名
2. 専門分野：「地球惑星進化素過程の解明と地球環境の将来像の予測」を目標とし、地球惑星システムにおける物質の移動と循環、環境変遷またはテクトニクスおよびダイナミクスに関連した広い分野。
3. 応募資格等：
  - (1) 上記専門分野で取得した博士の学位を有すること。
  - (2) 本専攻には後記 8. の研究グループがあり、このいずれかのグループに属して意欲的に教育・研究にあたり、且つ教室の活性化に大きく貢献しうること。
  - (3) 学部および大学院の授業を担当し、且つ学生の地質調査の指導ができること。
4. 応募締切り：平成17年4月18日（月曜日）  
書留郵便で「公募書類在中」と朱書きのこと。
5. 着任予定時期：平成17年8月1日以降できるだけ早い時期
6. 提出書類：
  - (1) 履歴書
  - (2) 研究業績リスト（必ず、査読有り原著論文、査読無し原著論文、総説（review）、その

他に区分して下さい。）

- (3) 主要な論文の別刷（またはコピー）5 編以内
- (4) これまでの研究概要と着任後の研究計画（A4 用紙 2 枚程度）
- (5) 教育に対する抱負（A4 用紙 2 枚程度）
- (6) 応募者についてご意見をいただける方（2 名程度）と、その連絡先

7. 書類送付先および問合せ先：

〒739 8526 東広島市鏡山1 3 1

広島大学大学院理学研究科

地球惑星システム学専攻長 渡辺 洵

電話：(082)424 7468

8. 現在の地球惑星システム学専攻の研究グループおよび教員構成（ホームページ [ <http://www.geol.sci.hiroshima-u.ac.jp> ] も参照下さい。）

- ・地球環境進化学：宮本隆寛（助教授）；狩野彰宏（助教授）
- ・地球造構学：竹下徹（教授，平成17年3月末転出予定）；早坂康隆（助手）；安東淳一（助手）
- ・地球惑星物質学：北川隆司（助教授）；大川真紀雄（助手）
- ・資源地球科学：渡辺洵（教授）；星野健一（助手）
- ・地球惑星内部物理学：田島文子（教授）；須田直樹（助教授）；中久喜伴益（助手）
- ・同位体地球惑星科学：日高洋（教授）；寺田健太郎（助手）
- ・微量元素地球化学：清水洋（教授）；高橋嘉夫（助教授）

### 「中性子の地球科学，環境科学への応用に関するシンポジウム」のお知らせ

2005年4月24日から29日の間，オーストリア，ウィーンで EGU（European Geosciences Union）が開催され，地球化学に関するセッションも数多く設定されております。この会議の一つのセッションとして2日間に渡り，「中性子の地球科学，環境科学への応用に関するシンポジウム」が開かれますので，ご興味のある方は是非ご参加下さい。

EGU Web site <http://www.copernicus.org/EGU/ga/egu05/>

Symposium on Neutrons at the Frontier of Symposium on Neutrons at the Frontier of Earth Sciences

and Environment - NESE Earth Sciences and Environment - NESE

NESE is fully integrated into the European Geosciences Union  
EGU-2nd General Assembly (Union Session US 1)  
Vienna, Austria, 25-29 April 2005.

#### Synopsis

NESE is one of a series of conferences organized jointly by European, American and Japanese scientific institutions with a strong affiliation to Neutron Scattering. As Earth and Environmental Sciences rely more and more on a deep understanding of processes on the atomic scale neutron scattering becomes an increasingly important tool of investigation. NESE aims at identifying future scientific needs in these areas. The findings will help neutron facilities to further adapt their infrastructure to the requirements of the wider scientific community. The look forward into the future will be based on a thorough analysis of past and present experimental highlights. The outcome of the conference will be documented in a report.

#### Scope of NESE

Modern societies increasingly influence the natural processes on Earth and at the same time are more and more dependent upon them. In order to achieve sustainable development it is essential to understand the mechanisms that regulate these processes. Such understanding requires in many cases the investigation of materials and their transformation at the atomic scale. Neutrons, due to their specific properties, are an ideal experimental probe for this purpose.

The picture that neutrons produce of atomic arrangements is at the same time precise and simple to interpret. The rather weak interaction of the neutron with matter, hence its highly penetrating power, is the foundation for a thorough and reliable sampling of the bulk properties. Furthermore this property makes neutron scattering a unique probe

enabling studies to be made at high temperature, pressure and magnetic field in complex and bulky sample environments. New generations of instruments and neutron sources will further extend the field of application towards higher pressures and temperatures as well as kinetic and high throughput studies. This is particularly important for geoscience research areas. Furthermore the spin of the neutron couples to microscopic magnetic fields and enables us to decrypt even the most complex magnetic structures and fluctuations.

The flagship experiments shown during the symposium will demonstrate how the precise knowledge of atomic arrangements and their dynamics provide unique information in geo-physical and environmental science. The symposium will cover a wide spectrum of topics with strong overlap in many EGU 2005 conference topics including:

- Mineralogy, Petrology, Geochemistry & Volcanology
- Magnetism, Paleomagnetism, Rock Physics & Geomaterials
- Energy, Resources and the Environment
- Planetary and Solar System Science
- Cryosphere

The symposium will bring together a distinguished panel of experts from Europe, the US and Japan: world experts in neutron science will share their expertise with researchers from the world of Earth Sciences and Environment. These two groups will have the unique opportunity to identify new areas of research in the Earth and Environmental Sciences where neutrons can play a relevant and even unique role.

#### **Early Earth Symposium 開催のお知らせ**

P 074 初期地球惑星誌：太陽系星雲から生命の誕生に至るまで

Earliest History of the Earth and Planets

Conveners: E. Takahashi, T. Kakegawa, Y. Abe and  
Jim Kasting

2005地球惑星科学合同大会の共通セッションとして上記の英語による国際セッションを開催します。この国際セッションは東京工業大学、東北大学、東京大学の3つのCOE拠点が共同で開催するもので、「我々の地球において生命が発生し進化しえたのはどのような必然・偶然によるのか」、天文学、惑星科学、高温高圧実験、宇宙地球化学、地質学、生命環境学などの専門に根ざした研究発表と分野の枠を超えた討議を目指します。それぞれの分野をリードする10人の研究者を海外から招聘します。大学院生にとっては記念すべき国際会議デビューの場として、研究者にとっても時間をかけて突き詰めた議論をする場として、またない機会になるでしょう。わが国のあらゆる大学、研究機関から多数の参加希望者を募ります。

口頭講演、ポスターいずれも英語で発表することになりますが、合同大会の最初の試みを成功させるために一人でも多くの皆さんの投稿をお待ちしています。

また、この国際セッションにあわせて、比較的少人数で(最大90人)テーマを絞った議論と親睦を深めるため、泊り込み合宿スタイルのDiscussion Meetingを開催します。各セッション(3時間)ごとに、外国人招待講演者を含む2~3名に基調講演を依頼し、その後、参加者全員による討論を予定しています。こちらにもふってご参加ください。学部生、修士課程院生の参加も歓迎します。

#### 世話人

東工大大学院地球惑星科学専攻 高橋栄一(代表)  
etakahas@geo.titech.ac.jp  
東北大学院地学専攻 掛川 武  
kakegawa@mail.tains.tohoku.ac.jp  
東大学院地球惑星科学専攻 阿部 豊  
ayutaka@eps.s.u-tokyo.ac.jp

#### 主な外国人招待者：\*日程調整中

Planetary Science: Robert N. Clayton (Univ. of Chicago), Jonathan Lunine (Univ. Arizona), \*Doug Lin (U.C. Santa Barbera), Kevin Zahnle (NASA)  
Earth Interior: H. O'Neill (ANU), B. J. Wood (Bristol Univ), S. Karato (Yale Univ)  
Early Earth Atmosphere: Jim Kasting (Penn State),

Early Life: Euan Nisbet (Univ. of London), Roger Buick (Univ. of Washington), Nic Beukes (Rand Afrikanus Univ, South Africa)

#### Discussion Meeting スケジュール(暫定)

海外職業訓練センター(幕張) <http://www.ovta.or.jp/div/facilities/index.html>

5月19日 外国人 招待者チェックイン  
20日 13:00~15:00 参加者登録  
15:00~18:00 セッション - 1  
(惑星形成)  
19:00~22:00 セッション - 2  
(内部進化)  
21日 9:00~12:00 セッション - 3  
(大気環境)  
14:00~17:00 セッション - 4  
(初期生命)  
19:00~22:00 バンケット  
22日 9:00~12:00 セッション - 5  
(総合討論)

合同大会国際セッション(スケジュールは3月中に決まります。下記は一例です)

幕張メッセ 5月22~26日

5月22日 13:00~17:00 Early Earth  
国際セッション - 1 (ポスター)  
23日 9:00~12:00 Early Earth  
国際セッション - 2 口頭  
13:00~17:00 Early Earth  
国際セッション - 3 口頭

Discussion Meeting 参加申し込み: 先着90名以内

参加費: 2泊2食(25000円 正参加者, JSPS-DC), (18000円 院生・学生)の予定

詳しくは、東京工業大学21世紀COE「地球:人の住む惑星ができるまで」ホームページ <http://coe21.geo.titech.ac.jp/index.html> を参照してください。

参加希望者は下記を、メールで事務局(coe21@geo.titech.ac.jp)に必要な事項を記入の上お送りください。後日事務局より受付番号と料金振込み方法をお知らせします。

\*\*\*Early Earth Discussion Meeting 参加申し込み\*\*\*

氏名 フリガナ  
年齢 性別  
所属  
身分  
住所  
メールアドレス  
チェックイン予定日： 5月 日  
チェックアウト予定日： 5月 日

\*\*\*\*\*

### 第11回地下水・土壌汚染と その防止対策に関する研究集会

「第11回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会」を次の要領で開催いたします。多数の発表申込みを期待いたします。

期日：2005年6月16日(木)～18日(土)

場所：市川市文化会館

(〒272 0025 千葉県市川市大和田1 1 5

<http://www.tekona.net/bunkakaikan/index.php>)

主催：日本地下水学会，(社)日本水環境学会，(社)地盤工学会，(社)土壌環境センター

後援：環境省，厚生労働省，千葉県，市川市ほか

発表費：1編につき9,000円(参加費1名分を含む)

申し込み締切：2005年2月10日(発表申し込み者)，  
6月3日(参加申込のみ)

発表受付確認：2005年2月中旬に発表申込者にお送り  
します。

原稿提出締切：2005年4月15日 事務局必着

発表分野：地下水・土壌汚染の実態・原因・経路に関する調査・検討，汚染物質移動の解析・観測，汚染の移動機構，汚染の防止対策・修復技術・観測例・修復評価，汚染の影響評価，産業系排水の管理と地下水・土壌汚染，放射性物質による汚染，地質・土壌に起因する自然汚染など。(新規，既報，検討中を含め，まともは問いませんが，商業広告的に過ぎる場合は，修正やお断りをする場合があります。)

発表方法：ハイブリット形式(3分程度の口頭発表+ポスター発表)

発表申込：詳しくは土壌環境センターホームページ(<http://www.gepc.or.jp>)をご覧ください。

申込み・問い合わせ先：第11回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会事務局

〒102 0083 東京都千代田区麹町4丁目2番地  
第2麹町ビル7階

(社)土壌環境センター 野村，大城，塚原

TEL：03 5215 5955，FAX：03 5215 5954

E-mail: [syuukai@gepc.or.jp](mailto:syuukai@gepc.or.jp)

### 2nd Annual Meeting of the Asia Oceania Geosciences Society (AOGS)のお知らせ

インド国立海洋研究所の M. Dileep Kumar 博士から以下のような2005年6月20～24日にシンガポールで開かれる the 2nd Annual Meeting of the Asia Oceania Geosciences Society (AOGS) の案内を依頼されました。興味のある方は是非参加して下さるようお願いいたします。

Dear Colleagues,

A Scientific Session (OA 18) on “Material exchanges at marine boundaries (land-ocean and air-sea) and surface ocean processes: forcings and feedbacks” is scheduled under the Section Oceans & Atmospheres (OA) as a part of the 2nd Annual Meeting of the Asia Oceania Geosciences Society, Singapore, from 20 to 24 June 2005. The Session will have about 15 contributory presentations of 12-15 minutes duration each and 4 Plenary Lectures of 40 minutes each, in a total of 6 hours duration. Topics to be covered under this Session are given below.

- (1) Atmospheric transport and deposition of materials over the ocean
- (2) River discharges of materials and surface ocean productivity
- (3) Changes in atmospheric and river discharges: altered coastal biogeochemistry and biodiversity
- (4) Exchange of gases and aerosols at air-sea boundary
- (5) Coastal upwelling: greenhouse gas emissions

We welcome the biogeochemical community to contribute to the Session by presentation of research work and interaction with other participants of the 2nd AOGS meeting. Last date for the submission of

Abstract is 1 February 2005. Additional Information on the Session, AOGS meeting, and abstract submission can be found at the following sites

AOGS Home details

<http://www.asiaoceania-conference.org/index.html>

For AOGS abstract details and deadlines

<http://www.asiaoceania-conference.org/submit/abstract.htm>

Convener

M. Dileep Kumar\*

National Institute of Oceanography, Dona Paula, Goa 403 004, India

\*presently with

Prof. Mitsuo Uematsu, Ocean Research Institute, University of Tokyo, 1-15-1, Minamidai, Nakano-ku, Tokyo 164-8639 (dileep@ori.u-tokyo.ac.jp)

## **iLEAPS 1st Scientific Conferenceのご案内**

IGBPの新しい陸域 大気インターフェイスのコアプロジェクト iLEAPS (the Integrated Land Ecosystem - Atmosphere Processes Study, <http://www.atm.helsinki.fi/ILEAPS/>) が2004年3月にスタートしました。

2006年1月に計画されております, iLEAPS 1st Scientific Conference の案内が iLEAPS IPO から送られてまいりましたので, お知らせいたします。

国内の問い合わせは下記までお願いいたします。

八木一行

農業環境技術研究所

地球環境部温室効果ガスチーム

305 8604 茨城県つくば市観音台3 1 3

電話 : 0298 38 8234

FAX : 0298 38 8199

E-mail: kyagi@affrc.go.jp

First Announcement

1st iLEAPS Science Conference in Boulder, Colorado, USA,

21. -26. of January 2006

iLEAPS (Integrated Land Ecosystem - Atmosphere Processes Study) is the new land-atmosphere project within the framework of the second phase of IGBP (International Geosphere Biosphere Programme). iLEAPS is an international multidisciplinary research program aimed at improved understanding of processes, linkages and feedbacks in the land-atmosphere interface affecting the Earth System. Specifically, the objective is to study how interacting physical, chemical and biological processes transport and transform energy and matter through the land-atmosphere interface. iLEAPS research ranges from cell level to global scale, diurnal to centennial and past to future. Integration of measurements and modeling is essential, as well as coupling of surface and atmospheric models.

On behalf of the international iLEAPS Scientific Steering Committee, we would like to invite you to participate in the 1st iLEAPS Science Conference.

The conference will highlight the relevant aspects concerning the interfaces between land-biosphere-atmosphere. In particular we will focus on four main topics: Land-atmosphere exchange of reactive and conservative compounds - key interactions and feedbacks in the earth system, feedbacks between land biota, aerosols and atmospheric composition in the climate system, feedbacks and teleconnections in the land surface-atmosphere-water-system and transfer of material and energy in the soil/canopy/boundary-layer system.

May 2005 2nd Announcement and call for papers

September 2005 Confirmation of papers

October 2005 Closing date for Early bird registration

21.-26. January 2006 Conference

For more information concerning the conference please go to

<http://www.atm.helsinki.fi/ILEAPS/boulder>

or contact direct michael.boy@helsinki.fi

If you want to keep updated with all new activities from and around iLEAPS please register online at <https://www.atm.helsinki.fi/ileapsform>.

ileaps-ipo@helsinki.fi  
iLEAPS International Project Office  
University of Helsinki  
Dept. Physical Sciences  
P.O. Box 68 FIN-00014 Helsinki Finland

### 平成18年度大学院理学系研究科化学専攻 (東京大学) 修士課程入学試験について

日本地球化学会の皆様，蒲生@東大海洋研です。

平成18年度大学院理学系研究科化学専攻(東京大学) 修士課程入学試験(本年8月実施)の内容が，大幅に変更されますので，お知らせします。化学を専門とするだけでなく，物理系・生物系・地学系の素養も持つ学生が受験しやすくなると思われます。

昨年までは，

- 1) 一般教育科目(数学・物理学・生物学・地球科学のうち1科目と化学の計2科目)
- 2) 外国語(英語)
- 3) 専門科目(化学全般，6問から4問選択解答)
- 4) 口述試験

今回から，以下のように変更になります。

- 1) 一般教育科目はなし
- 2) 外国語は，出願時に TOEFL のスコアを提出
- 3) 専門科目(化学6題，数学2題，物理2題，地球科学2題，生物2題の計14問のうちから5題を選択)
- 4) 口述試験

詳細については，下記をご覧ください。

<http://www.chem.s.u-tokyo.ac.jp/graduate/index.html>

### 書評

「地球は火山がつくった：地球科学入門」

鎌田浩毅著 205ページ

岩波ジュニア新書467 ISBN 4 00 500467 9  
2004年4月20日発行 780円(税別)

地球科学で扱う現象は多様な要素の絡み合った複雑な過程であるが，その本質は単純な原理で説明できることがある。そのような原理を見出すことが地球科学の研究の醍醐味である。本書はこの地球科学研究の面白さを若い読者に伝えるために書かれた本である。

本書は「火山はすごいー日本列島の自然学(PHP新書)」で火山の面白さを熱く語った著者が，火山と地球のおもしろさと不思議をジュニア向けに語った本であり，著者自身が述べているように，なにより判り易く書かれている。

本書の最大の特徴は，著者自身の感じている「おもしろさ」を伝える配慮が最大限に成されていることであろう。そのため，まず著者自身の経験や感動・感心が生き生きと述べられている。その語り口に引込まれながら著者と感動を共有する内に，その現象が何故起きているかが解きあかされてゆく。そして，いつの間にかその仕組みの面白さや原理の美しさにも引込まれている。

本書では，前半に火山噴火現象やその仕組みが述べられ，広範でプレートテクトニクスやブルームテクトニクスなど火成活動による地球のダイナミクスが解説されている。その内容は多岐に渡るが，網羅・系統的な知識を伝えることは意図されていない。しかし，その支配原理の“つぼ”だけはしっかり押さえてある。勉強するための本ではなく，勉強するためのモチベーションを得るための本と言えるだろう。

一般向けの解説本を書くことは難しい。ましてジュニア向けの入門書である。時には正確さや厳密さを犠牲にしたり，判っていないことも判ったように書くことも必要である。とはいえ，専門家としては気になってしまうこともある。私にとっては「噴火の仕組み」の解説は，「そう言っちゃっていいの!?」という感想の連続であった。しかし，ではどう書いたらいいか，そう考えてみると，これが難しい。結局，何を最も伝えたいか，という問いに戻ってくる。研究者の立場からは，そんなことも考えながら読んでみるのもいいかも知れない。

(産総研 篠原宏志)

## ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会，シンポジウムの案内，人材募集，書評，研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上，電子メール，フロッピー（マックもしくは Dos/V いずれでも結構です）での原稿を歓迎いたしますので，ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2005年6月頃を予定しています。ニュース原稿は4月中旬までにお送りいただくよう，お願いいたします。また，ホームページに関するご意見もお寄せください。

### 編集担当者

米田成一

〒169 0073 東京都新宿区百人町3 23 1  
国立科学博物館理工学研究部

Tel : 03 3364 7142 , Fax : 03 3364 7104

E-mail:s-yoneda@kahaku.go.jp

高橋和也

〒351 0198 埼玉県和光市広沢2 1  
理化学研究所加速器基盤研究部

小林貴之（ホームページ）

〒156 8550 東京都世田谷区桜上水3 25 40  
日本大学文理学部